

[報告] 第39回歴史地震研究会巡検参加記

立命館大学大学院 文学研究科* 濱野 未来

A Report of Field Trip during the 39th Annual Meeting

Miki HAMANO

Ritsumeikan University, Graduate School of Letters

18, Hiranokamiyanagi-cho, Kita-ku, Kyoto-city, Kyoto, 603-8355 Japan

§1. はじめに

令和4年9月17日(土)から19日(月)の3日間にわたり、大阪府高槻市の関西大学高槻ミュージックキャンパスにて、第39回歴史地震研究会が開催された。大会3日目となる19日には、数年ぶりとなる巡検が実施された。

本来であれば、高槻市内の歴史地震に関連する地点として、今城塚古代歴史館、今城塚古墳の地震地すべり痕跡、有馬・高槻断層の横ずれ変位痕跡を見学したのち、京都大学阿武山地震観測所に訪れる行程であった。しかしながら、台風14号の接近に伴い、午後から新幹線などの交通機関が休止することが予測されていたため、午前中に京都大学阿武山地震観測所に訪れるのみとなった。

§2. 京都大学阿武山地震観測所

9時半に会場校を出発したバスは、30分程の道のりを経て京都大学阿武山地震観測所に到着した。道中、本来の見学予定であった今城塚古墳及び今城塚古代歴史館の外観を僅かながら臨むことができた。

2.1 地震学の歩み・歴代地震計見学

到着後、まずは飯尾能久氏(京都大学防災研究所・教授)から、阿武山地震観測所の来歴や地震観測の歴史について説明していただいた。具体的には、観測所設立に至る背景や、設立時から現在のサイエンス・ミュージアムという形態に至るまでの歴史、観測所の設立に尽力した初代所長・志田順の地震学者としての歩み、地震観測技術の発展等についてお話していただいた。

阿武山地震観測所の大きな役割を担った「満点計画」(小型の地震計を高密度で多数設置し、従来の観測よりも高い解像度で地震を調べるプロジェクト)に

ついでの紹介もあり、こうした最新の研究を支える機能を持つ点は、地震学の歴史と最新研究が地続きのものであることを認識できる重要な要素だと感じた。

さらに、地震学からは離れた特徴的な点として、裏山に古墳(阿武山古墳)があることについても言及があった。この古墳は、地震計を設置する際に偶然みつけたものだそうで、自然科学だけでなく人文科学に関連するトピックも有する特異なサイエンス・ミュージアムとの印象を受けた。



写真1 阿武山地震観測所入口

その後、参加者一行は2班に分かれて地下階にある地震計類の見学ツアーに繰り出した。案内して下さったのは「阿武山サポーター」と呼ばれるボランティアスタッフの方々に、実際に観測機器類を動かしながら紹介して下さった。そのうちの一つ、「レボイル・パ

* 〒603-8355 京都府京都市北区平野上柳町18
電子メール: gr0314xt@ed.ritsumei.ac.jp

シュウィッツ傾斜計」は、上賀茂地学観測所内の倉庫跡の瓦礫に埋もれていたところを発見されたという数奇な経緯を経て展示されるに至ったという。このエピソードから、使われなくなった納屋や蔵に眠っていた民俗資料が発見される事例を想起したが、大学施設でも類似の事例があるということに驚いた。

また、筆者が参加していた見学班では、随所で初代所長である志田順氏や地震計について、参加された会員の方々からのこぼれ話もあり、歴史地震研究会ならではの様相も垣間見えた。

地下階で地震計類を見学したのちは、特徴的な螺旋階段を一息に屋上まで上がり、阿武山から見下ろす絶景を眺めた。屋上からは、大阪・梅田の高層ビル群や万博公園を見渡すことができた。見学時は小雨が降り出していたが、天気が良ければ淡路島や明石海峡大橋なども見るができるという。

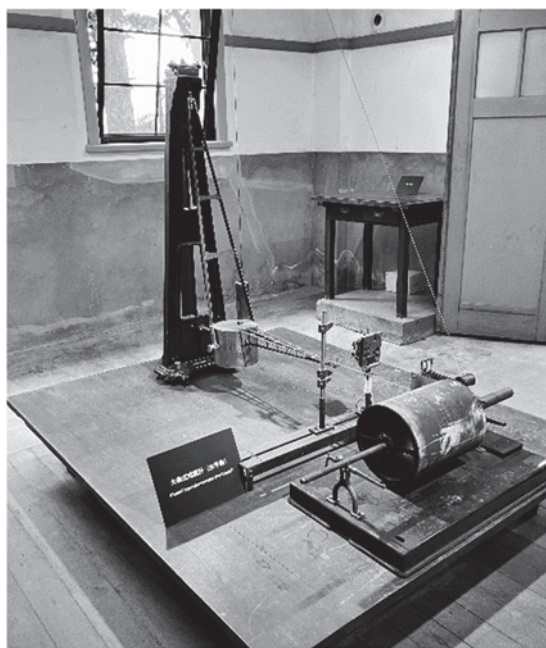


写真2 大森式地震計

2.2 阿武山地震観測所の建築

歴代地震計の見学ツアーを終えた後は、阿武山サポーターの溝口氏から阿武山地震観測所の建築の特徴・見どころについての紹介がおこなわれた。

昭和5年(1930)に開設された当観測所は、モダニズム建築様式で、ドイツ表現主義の影響を受けている建築とのことで、レトロな雰囲気が印象的であった。歴史的な建築物として注目されているということで、映画やTVドラマの撮影地となったこともあるという(俳優・綾瀬はるかが使用した椅子として「アヤセハルカ

イス」が展示されていた)。

また、2014年に行われた耐震化のための大規模改修工事についてもお話いただいた。なるべく開設当初の状態を残すように尽力した点や、工事の際に入った建設業者の眼によって、新たに価値が見出された建築意匠があったことなどがとくに興味深かった。

その後、参加者一行は説明があった箇所を実際に巡る見学ツアーへと向かった。本館に入る前の玄関ホールだけでも、注目すべき箇所が複数あり、神殿のような雰囲気をもつ丸柱やスクラッチタイル(溝模様が刻まれたレンガ)などを観察した。建物の随所にある丸窓もまた、建築全体に可愛らしい風情を加えているような印象を抱いた。次に、本館内のエントランスホールやセミナー室、2階の和室などを巡り、通常は一般公開されていない宿泊室も拝見することができた。

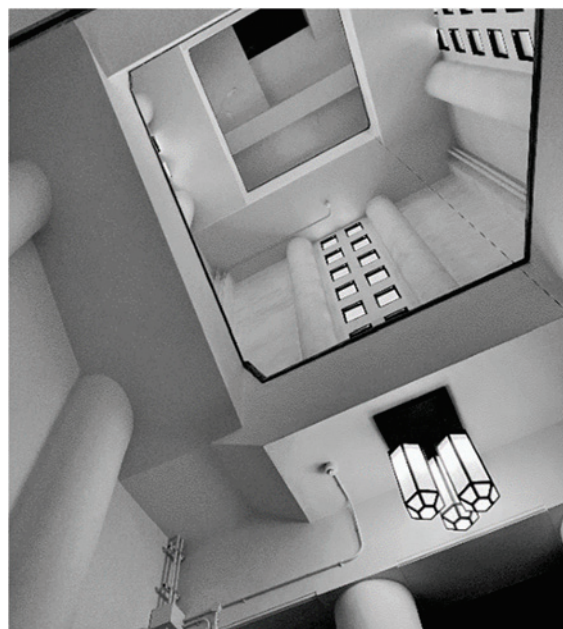


写真3 特徴的な螺旋階段(本館)

2.3 阿武山アースダイバー

最後に、阿武山地震観測所が制作したオリジナルの映像コンテンツ『阿武山アースダイバー』を鑑賞した。「アースダイバー」という名の通り、大阪平野周辺の地表の下に潜ったかのような、非常に迫力のあるCG映像であった。

映像の内容は、大阪平野に堆積した土砂の下に急峻な崖が連なっている様子や、上町断層・生駒断層・有馬高槻構造線などの活断層について、解説とともに学ぶことができるものであった。通常は目で見ることができない本来の地形や活断層を、CG映像によ

って視覚的に捉えることができる点は、本コンテンツならではの魅力であろう。

§ 3. おわりに

阿武山地震観測所をあとにした一行は、13 時頃に会場校に到着し、巡検は無事に終了した。

当観測所は、地震学だけでなく、建築や古墳など様々な見どころが溢れる場所であった。加えて、観測所周辺の自然や阿武山古墳などに焦点を当てたいいくつかのオプションツアーなども開催しているとのことで、複数回訪れても楽しめる場所であろう。

さらに今回の巡検でいただいた阿武山観測所のガイドブックには、地震学をはじめとする様々なトピックについてより詳しく書いてあり、非常に読み応えがあった。編集後記によれば、ガイドブックとして内容を固定するのではなく、増刷のたびに新たなトピックや特集記事を盛り込み、ニュースレター的性格も持たせたいとのことで、巡検直後ながら再訪の計画に思いをめぐらせることとなった。

最後に、感染症の流行や台風の接近といった問題に見舞われながらも、2019 年ぶりの対面での大会と巡検を円滑に運営してくださった行事委員会の皆様に感謝申し上げます。



写真 4 集合写真